

令和5年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立日立特別支援学校 教諭 滑川 昭

- 1 派遣期日 令和5年11月10日（金）～ 11月10日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）群馬大学共同教育学部附属特別支援学校
所在地 群馬県前橋市若宮町二丁目8番1号
<https://shc.edu.gunma-u.ac.jp/index.html>
- 3 研修内容

9：00～9：25	全体会・基調講演
9：40～10：50	授業公開・意見交換会（高等部保健体育科）
11：20～12：10	提案授業
12：10～13：10	昼食・休憩
13：10～14：30	学部別研究会（中学部国語科）
14：45～16：25	講演会「知的障害教育における『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を考える」

【講師】文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課
特別支援教育調査官 加藤 宏昭 様
- 4 感想

令和5年度第44回群馬大学共同教育学部附属特別支援学校公開研究会に参加をした。群馬大学共同教育学部附属特別支援学校では、令和4年度から「子どもが自ら考え、学び合う授業実践～知的特別支援学校における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のための視点を通して～」というテーマで「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点から学習活動や支援を考えた研究を進めている。

学習指導要領及び「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日）では、「令和の日本型学校教育」の姿として、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ、児童生徒の資質・能力の育成が求められている。

子どもが学習を調整しながら学ぶことができるよう、「個に応じた指導」を充実することが必要であるとされている。「個に応じた指導」の在り方は「指導の個別化」及び「学習の個性化」に分けられる。「指導の個別化」は教師が支援の必要な子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことである。「学習の個性化」とは、教師が子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身学習が最適となるよう調整することである。「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」とされている。

協働的な学びとは、上に記した「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子ども同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、必要な資質能力を育成するとされている。

高等部保健体育科の授業では、「マット運動～声をかけあって技をマスターしよう～（器械運動）」を参観した。「体育の見方・考え方」を働かせている具体的な姿として、「技の特性に合わせた練習に声を掛け合って取り組み、友達と技ができるようになったときの喜びや楽しさを感じ、意欲的に練習に取り組むこと」と設定し、器械運動の中でマット運動を取り上げた単元となっている。留意点及び支援のポイントとして指導案には、教師の関わり、教材・教具、環境構成でまとめられている。教師の関わりとしては、TTの役割の明確化、協働的な学びを進めるために、生徒同士が関わり、アドバイスをし合えるような支援を明記

している。教材教具では、安全面への配慮はもちろん、生徒が自分で振り返りができるような工夫をし、環境としては、タブレット端末を各グループに準備し、全体を録画することのできるタブレットも用意されていた。実際の授業では、マット運動における技の習得段階を示した掲示物を参考に生徒自身が個別最適な学びの姿と言える自己選択、自己決定をする場面が多く見られた。また、グループ活動や集団演技を取り入れることで、生徒にとっては自然な形で、教師にとっては意図的な仕掛けとして、生徒同士で練習をしたり、タブレット端末で撮影をし、アドバイスをし合ったりする姿が見られ、協働的な学びにつながっていると感じた。意見交換会ではT1の教員から、器械運動は、個別の練習で終わってしまうことが往々にしてある中で、集団演技を入れることで、個別に磨いてきた技を集団の中で生かす場面を作ってきたと話があった。意図的な教師の場面設定や効果的な掲示物、ICTの活用など、参考にできる場面が多くある授業であった。

中学部国語科の授業では、「えらんで、つなげて 伝えよう～『〇〇ものがたり』～」（書くこと）を参観し、午後の学部別研究会に参加した。授業では、写真をみて、単語や助詞のカードを選んで、文章を作成する活動を行っていた。この授業では国語科の「言葉による見方・考え方」を働かせている具体的な姿として、「気に入った言葉や表現を選んで文を作ったり、文を修飾したりして詳しくすること」と設定していた。実際の授業で、これらの見方・考え方を働かせるための教材・教具、板書、教師の関わりがあった。教室中に単語カードが貼られ、一見すると情報過多にも見られたが、生徒がその状況や思いにより近い言葉を考えるために必要な情報量であるとも感じた。教師は生徒の意欲を高めるために、肯定的な言葉を掛け続け、生徒は常に前向きに、学習に取り組む様子が見られた。

講演会では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を考える」をテーマに、学習指導要領、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」を基とした、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官加藤宏昭先生から話があった。講演会の中で「個別最適な学び」「個に応じた指導」「協働的な学び」などの説明があり、当日の群馬大学共同教育学部附属特別支援学校の授業づくり等から「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に行うことが児童生徒の学びにとって大切であるとのことであった。また、学びの本来の目的として、学習指導要領で示されている3つの柱（知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）を身に付けることであり、年間指導計画を基に、それらを達成するために授業づくりや授業改善の視点である主体的・対話的で深い学びの実現、学びの視点である個別最適な学び、協働的な学びの一体的な充実が必要であるとの話もあった。そして、各授業のゴールは教科の見方・考え方を働かせ、教科本来の学びをすることであり、教科として評価することが求められているとのことであった。

今回の研修では、学習指導要領、令和3年度答申等を基にした今教師に求められている授業づくりについて知ることができた。資質・能力を身に付けるためには、教科本来の学びが必要であり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実することで、主体的・対話的で深い学びにつながる重要性を再発見できた。一つ一つの授業づくりを丁寧に行い、TTの連携を目の当たりにし、板書や学びの環境が整っていることが児童生徒の確かな学びにつながることも理解できた。教師の肯定的な関わりによって、児童生徒が授業に前向きに取り組んだり、発言したりする姿を見ることができた。意見交換会や学部別研究会では、授業を参観した先生方と有意義な意見交換をすることができ、刺激をもらった。講演会では、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官加藤宏昭先生から、これからの教育で大切なことを学ぶことができた。

日立市教育研究会先進校等調査派遣研修に行かせていただき、上記のような学びを得ることができたと考えている。そして、改めて日々の学校教育や授業づくりに生かし、さらなる教育の充実を目指したい。また、丁寧な授業づくりを触れることで、本来の教師になった目的を見つめ直すことができ、とても有意義な研修となった。